

昭和47年の水稲・だいず新品種解説(2)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	藤井, 啓史 ほか,
巻/号	27巻9号
掲載ページ	p. 412-418
発行年月	1972年9月

- 栽培に関する試験 (1965)
- 2) 青森農試：土壤改善を基盤とすり畑作生産力増強に関する研究 (昭和43, 44, 45年度各成績書)
 - 3) 青森農試：同上 総合成績書 (1971)
 - 4) 阿部ほか三名：土壤改善による畑作物の増収 東北農業研

- 究, 第12号 (1971)
- 5) 岩田文男・大久保隆弘：とうもちこしの生育ならびに体内成分の推移に関する研究 第5報 最適栽植密度および最適葉面積指数の土壤間差異日作紀 東北支部会報14号(1972)

昭和47年の水稲・だいでず新品種解説 (2)

藤井啓史

水稲

アキツホ

登録番号 水稲農林224号 (系統名：東海33号)

来歴 昭和37年東海近畿農業試験場において、「ヤマビコ」を母とし、「GA-3 (後の日本晴)」を父として人工交配を行ない、以来系統育種法により選抜固定をはかり、昭和43年 F₆より「東海33号」の系統名を付して関係府県に配布し、地方適否を検討してきたもので、昭和47年度で雑種第10代である。

形態的特性 稈長はヤマビコより7~10cm短かく、日本晴程度で、穂長も日本晴なみでヤマビコよりやや短く、穂数は両品種と大差ない中短稈中間型の稈種である。止葉はやや長いかなり立ち、草状は良好で、熟色もよい。粒着密度は中位で、まれに短芒があり、ふ色およびふ先色は黄白である。脱粒性は難であるが、わずかに落ちやすい。玄米の



〈左よりアキツホ、日本晴、ヤマビコ〉

粒形は中で、粒大はヤマビコよりやや小さいが、日本晴より大きく、中大粒に属する。心白はほとんどなく、腹白もごくわずかで、光沢があり、ヤマビコや日本晴程度以上のごく良質米である。搗精歩留りも高く、食味は良好である。

生態的特性 出穂期は日本晴よりやや晩くヤマビコ程度で、温暖地平担部では早生~中生種に属する。初期登熟速度の早い特性をもち、とくに中山間部~高冷地の一部でこの特徴がみられる。

耐倒伏性はヤマビコより明らかに強く、日本晴や全南風と同程度以上である。耐病性はいもち病にかなり強く、葉いもち病にはヤマビコなみの強さで、穂いもち病にはヤマビコよりわずかに劣るが日本晴より強い。しらはがれ病にはヤマビコと大差なく中~やや弱であるが、金南風ほど弱くはない。ごまはがれ病の発生はヤマビコ・日本晴と同程度で弱く、秋落抵抗性は十分でない。カラバエ耐虫性は強く、ヤマビコより幾分まさるようである。穂発芽性は日本晴程度で、やや難である。

収量性は一般には日本晴程度かやや劣り、ヤマビコとは同程度で、とくに多収とはいえないが、登熟性能がよく、登熟歩合が高くて粒の充実もよいことから、年次変動が比較的少なく安定している。さらに初期登熟性のよいことも加わって、標高の比較的高い地帯での普通移植または稚苗移植栽培でも安定多収を期待できる。

栽培上の注意 (1) ごまはがれ病にやや弱く、またやせ地や秋落地では少収となるので、ひどい秋落地での栽

第1表 アキツホの一般特性

形質	アキツホ	ヤマビコ	日本晴	金南風
出穂期	8月26日	8月26日	8月24日	8月30日
稈長	83cm	93cm	83cm	81cm
穂長	19.8cm	20.6cm	19.9cm	19.8cm
穂数	19本	18本	18本	19本
芒の多少・長短	稀・短	稀・中	極稀・短	稀・短
ふ先色	黄白	黄白	黄白	黄白
脱粒性	やや難	難	難	中
耐倒伏性	極微	中	微	微
葉いもち耐病性	やや強	やや強	中	中~やや弱
穂いもち耐病性	中	中~やや強	やや弱	弱
白葉枯耐病性	中~やや弱	やや弱	中~やや強	弱
ごま葉枯耐病性	弱	弱	弱	やや強
カラバエ耐虫性	強	強	強	—
a 当り玄米重	49.5kg	47.1kg	50.0kg	47.5kg
玄米千粒重	22.6g	23.0g	21.8g	21.7g
玄米品質	上中	上下	上下	中中

注) 東海近畿農試, 昭年42, 45, 46年の3カ年平均値。ただし金南風は昭42, 43, 45年3カ年平均をアキツホとの比較値により補正。

培をさけ、同時に土壌改良や施肥・水管理の合理化により秋落しないような栽培をすることが大切である。

(2) しらはがれ病耐病性はヤマビコ程度で強くないので、多発地では注意を要する。

(3) 高温年次には登熟が早まり、登熟期間が短くなることから、刈遅れにならないよう注意すること。

適地および奨励品種採用県 東海以西の温暖地の平坦部から中山間部の中庸～肥沃地において、普通栽培および稚苗移植（機械化）栽培に適するが、とくにヤマビコの強稈化や、金南風・中生新千本の早熟・良質化が望まれる地帯に好適すると思われる。

昭和47年度から静岡県、奈良県および広島県で奨励品種に採用され、静岡県ではヤエホ、日本晴および高冷地の金南風などの代替として約3,000 ha、奈良県では新金南風を主対象に約5,000 ha、広島県ではヤマビコ、サトミノリの全部および中生新千本の1部に替えて約10,000 haの普及が見込まれている。

命名の由来 片親の「日本晴」の名にちなみ、日本の別称「秋津島」の名をとる。

(東海近畿農試水田作物第1研究室長 藤井啓史)

ミネユタカ

登録番号 水稲農林225号(系統名:中国46号)

来歴 縞葉枯病抵抗性品種育成のための育種計画のなかで、昭和38年中国農業試験場において「St No.1」(中国31号の姉妹系統)を母とし、「幸風」を父として交配を行ない、冬季間F₁を温室で世代促進栽培を行なった。F₂以後は系統育種法に準じて選抜固定をはかり、生産力検定試験に供試してきたが、成績良好であったので、昭和43年中国46号の系統名を付し、中国、四国、九州の各県に配付し、地方適否を検討してきた。昭和47年は雑種10代にあたる。この品種は本邦水稲品種のなかで、縞葉枯病抵抗性品種第1号である。



〈左よりミネユタカ、中生新千本〉

形態的特性 稈長は

「中生新千本」と同程度の80～85cmである。穂長はかなり長く大穂であるが、穂数はやや少ない。中稈長穂偏穂

重型になる。下葉の枯れ上がりも少なく、止葉が穂波の上に抜きでており、成熟期まで葉色がおとろえない。芒はほとんどみられないが、まれに短芒をみることもある。籾の着生はやや密で脱粒難のうるち種である。

第2表 生育・収量調査成績(中国農試、昭42～45年の4ヵ年平均)

品種名	移 植 栽 培									
	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/㎡	出穂期 月日	成熟期 月日	収量 kg/a	千粒重 g	品質	搗精歩 合%	
ミネユタカ	80	21.5	333	9.1	10.27	45.0	21.6	5	91.2	
中生新千本	87	19.4	422	9.2	10.25	44.7	21.8	4.7	90.8	
黄金錦	100	20.6	309	9.4	10.27	41.6	21.0	5	91.8	
直 播 栽 培										
ミネユタカ	84	20.7	374	9.1	10.26	51.8	21.6	4.5	91.6	
中生新千本	82	18.7	429	9.1	10.25	47.0	21.8	4.3	91.7	
黄金錦	97	20.0	323	9.2	10.26	42.1	21.0	3.8	92.2	

生態的特性 出穂期は「中生新千本」と同程度で9月1日ごろになる。成熟期は「中生新千本」より2日おくれ10月27日ごろになり、温暖地では中生種に属する。稈は強く「中生新千本」よりはるかにまきり、「ホウヨク」に近いくらい強稈であり、直播栽培を行なってもほとんど倒伏をみない。

「ミネユタカ」の最も大きな特徴は、縞葉枯病抵抗性をもつことである。縞葉枯病はヒメトビウカが媒介して大発生するが、防除地域が広いいため、多額の農薬を使っても完全に防除できなかった。さらに、最近では農薬公害の問題もあり、今後は農薬による徹底した防除は望めないところであるが、本品種を栽培する限り、縞葉枯病に対しては全く防除を必要としない大きなメリットがある。

また、本品種は、秋落抵抗性をもち、下葉枯れ少なく熟色はきわめて良好であり、ゴマ葉枯病抵抗性は「中生新千本」よりかなり強く、ごく強いほうである。

いもち病に対しては特定の抵抗性遺伝子もっていないが、葉いもち病は「中生新千本」と同程度であり、穂いもち病は「中生新千本」より幾分強く、「黄金錦」および「ヤマビコ」程度であり、暖地品種の中生種ではやや強いほうである。白葉枯病の抵抗性は「中生新千本」よりまさるが、「ヤマビコ」程度で強いほうではない。紋枯病についても「中生新千本」と同様に弱い。イネカラバエについては「中生新千本」および「ヤマビコ」と同様に強いほうである。しかし、大穂で一穂着粒数が多いので登熟性がややわるく、とくに秋季の低温登熟性はよくない。

収量性は、移植栽培では「中生新千本」と同程度であ

るが、直播栽培の場合には「中生新千本」より10%近く増収している。玄米は「中生新千本」程度でわずかに小粒であるが、品種はよく、腹白、心白がみられず、光沢もよく、「中生新千本」と同程度によいと判定される。搗精歩合も高いほうで、食味は「ヤマビコ」にまさり、「中生新千本」と同程度でよいほうである。

栽培上の注意 本品種は、縞葉枯病抵抗性をもつばかりでなく、収量性も高く、良質で食味もすぐれ、倒伏にも強く、しかも秋落抵抗性もち、数々のすぐれた特徴がある。その反面、穂面の上に大きくて長い止葉が抜けており、とくに窒素肥料の多施用により過繁茂となり、ひいては成熟期が遅延する欠点がある。とくに秋早冷の時期には穂の基部の稔実がおくれ、品質をおとすことがある。また、成熟期をすぎても葉色がかわらないので、刈取り時期の判定をあやまらないことが肝要である。

適地および奨励品種採用県 「ミネユタカ」は「中生新千本」および「金南風」と熟期がほぼ同期であり、これらの2品種が栽培されている中国、四国、九州の平坦部および中山間地帯で、縞葉枯病多発地域あるいは、地力中庸ないしやや肥沃地において安定多収をあげることができる。また、温暖地に多い浅耕土の秋落地帯でもその真価を發揮できる。さらに、縞葉枯病抵抗性、耐倒伏性ならびに直播での安定多収性などから考えて、今後栽培面積の増加が予測される直播栽培では、その威力がとくにみとめられて、かなりの広域適応性をもつものと考えられる。

昭和47年度から大分県において奨励品種に採用し普及に移されることになったが、「金南風」の代替品種として期待され、約5,000 haの普及が見込まれている。

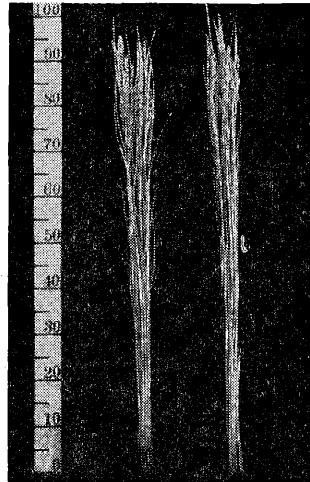
命名の由来 栽培上の諸特性がひいており、平坦地から中山間地帯に広く適し、安定した豊かなみもりをもたらすところから「ミネユタカ」と名付けられた。

(中国農業試験場作物部作物第1研究室 鳥山国土・篠田治躬・山本隆一・関沢邦雄)

ツクシバレ

登録番号 水稻農林226号(系統名:西海112号)

来歴 昭和34年、農林省九州農業試験場(筑後市)で、「西海62号(ホウヨク)×豊千本」の人工交配を行ない、その後も同場で世代促進を行ないながら、集団育種法により育成されたものである。昭和43年(F₁₀)より「西海112号」の系統名で関係府県に配付して、地方的適否を確かめてきたもので、昭和47年度世代はF₁₄にあたる。



〈左よりツクシバレ、レイホウ〉

形態的特性 稈長・穂長ともにシラヌイと同程度の短稈穂数型の稈種である。レイホウに比べると稈長は約8cmくらい短く、穂数はやや多い。稈の太さはやや細く、穂は白色の短芒が少しあり、ふ色は黄白である。粒着密度は中の密で、脱粒性はやや易である。玄米は中形・中粒で、かなり濃い飴色を呈し、品質はレイホウにまさるとも劣らぬくらい良好で、食味はレイホウ程度によい。玄米千粒重はレイホウ・ホウヨクと同程度、草状はシラヌイとコクマサリの中間であり、止葉はやや直立し、熟

第3表 ツクシバレの一般特性

品種名		ツクシバレ		(比)シラヌイ		(比)レイホウ	
		形質		イ		ウ	
早草	晩	中生の晩短稈・穂数型	中	中生の晩短稈・穂数型	中生の晩短稈・穂数型	中生の晩短稈・穂数型	中生の晩短稈・穂数型
	性	(多肥)	(極多肥)	(多肥)	(極多肥)	(多肥)	(極多肥)
出穂期	(月・日)	9.6	9.7	9.4	9.5	9.6	9.8
稈長	(cm)	71	74	70	73	78	81
穂長	(cm)	19.9	19.9	19.7	20.0	19.7	20.0
m ² 当り穂数	(本)	344	379	337	349	338	366
a 当玄米重	(kg)	59.3	60.0	60.0	59.5	58.5	59.7
同上収量比	(%)	101	103	103	102	99	103
玄米千粒重	(g)	23.7	23.5	25.5	25.3	23.2	23.2
玄米品質		2.8	3.2	3.5	3.5	3.0	3.2
食味		良		中		良	
芒の多少	・長短	少・短		稀・短		稀・短	
ふ	先色	白		白		白	
ふ	色	黄白		黄白		黄白	
脱粒	性	やや易		やや易		やや易	
耐倒伏	性	極強		強		強	
耐病性	葉いもち病	弱		弱		強	
	穂首いもち病	やや弱		やや弱		強	
	白葉枯病(II型)	強		強		やや強	
調査地	紋枯病	中		中		中	
	調査地	九州農業試験場					
調査年次		多肥:昭42~45の4カ年, 極多肥:昭42~46の5カ年					

(注) 1. 収量比はホウヨクを100とした。
2. 玄米品質は数値の小さいほど良いことをしめす。

色はかなり良い。

生態的特性 出穂・成熟期はレイホウと同程度で、九州北半では中生の晩に属する。ごく短稈のため倒伏にはきわめて強く、レイホウやホウヨクにまさる。葉いもち病には弱く、穂首いもち病にやや弱く、白葉枯病のII型菌には黄王程度に強い。紋枯病には中位である。生産力は安定して高く、シラヌイ程度の多収性を備えている。

栽培上の注意 熟期がレイホウと同程度であるので、レイホウの入り得ない中山間・山麓上部への本品種の導入は不適である。いもち耐病性の点で激発地帯や、草型の点で地力せき薄地帯への導入は不適である。作季・栽植密度・施肥量・施肥法は従来のレイホウ・シラヌイ・コクマサリなどと同程度でよい。栽培管理の点ではとくにいもち病、萎縮病の早期発見・予防・防除に留意すべきである。白葉枯病では普通のII型菌にはきわめて強いが、I型菌(ベニヤ菌)には弱いので、とくに冷涼な年にはI型菌が発生しやすいので警戒が必要である。多収で、レイホウにまさるとも劣らぬ品質上の素質を備えているので、この長所を大いに発揮できるようにすれば、産米改良上、大いに期待できる品種である。

適地および奨励品種採用県 本品種は昭和43年から4カ年にわたって関係府県に配付し、地方的適否が検討されたが、とくに福岡県・佐賀県で優れた成績をしめし、これら両県の平坦地帯、とくに筑後平野・佐賀平野の肥沃地帯に好適する。本品種の対象となる品種は、現在ではトヨタマならびにレイホウの一部であるが、シラヌイ・コクマサリの草状と長所を保持しつつ良質化されたものである。かつてこれら両品種が普及していた地帯には十分に入りうるものと思われる。

昭和47年度から佐賀県で奨励品種に、福岡県で準奨励品種に採用し、普及に移されることになった。

命名の由来 「筑紫晴」を意味し、本品種の適地は筑紫平野であり、この地帯では10月下旬から11月中旬にかけて、年間で最も晴天がにつき、この頃に収穫され、草状・品質ともにすがすがしい。

(九州農試作物第1部作物第1研究室長 岡田正憲)

アカネモチ

登録番号 水稻農林糯227号(系統名:西海糯117号)

来歴 昭和38年、農林省九州農業試験場(筑後市)で、「ホウヨク×祝糯」の人工交配を行ない、その後も同場で世代促進を行ないながら、集団育種法により育成されたものである。昭和43年度(F₃)より「西海糯117号」の系統名で関係府県に配付して、地方的適否を確かめてきたもので、昭和47年度世代はF₁₂にあたる。



〈左よりアカネモチ, サイゴクモチ〉

形態的特性 「祝糯」に比べた場合、稈長は約27cm短く、穂長もわずかに短い。穂数の多い、極短稈穂数型の糯品種である。稈は細く、穂は稀に褐色の短芒をつけ、ふ先色は褐色で、ふ色は紫褐色である。粒着密度は中位で、脱粒性はやや易である。玄米の形状は中形で、粒の大きさは中の子で、乳白色を呈し、品質・食味ともに良好である。玄米千粒

重は祝糯よりやや軽く、草状は稈のコクマサリに類似して、葉は直立し、熟色はよい。兄弟品種のヒヨクモチと

第4表 アカネモチの一般特性

形質	品種名		(比)祝糯		(比)ヒヨクモチ	
	アカネモチ		(標肥)	(多肥)	(標肥)	(多肥)
出穂期(月日)	9.7	9.5	9.9	9.8	9.9	9.9
稈長(cm)	63	66	90	93	65	69
穂長(cm)	18.3	18.5	20.7	21.2	18.9	19.2
m ² 当り穂数(本)	376	401	361	367	370	384
a当玄米重(kg)	51.0	53.0	50.5	48.9	53.1	55.3
同上収量比(%)	100	103	100	95	104	109
玄米千粒重(g)	20.9	20.9	22.5	22.5	22.6	22.7
玄米品質	3	3	4	4	3	3
食味	良		中		良	
芒の多少	短		短		短	
ふ先色	紫褐		褐		褐	
ふ色	紫褐		赤褐		黄白	
脱粒性	やや易		やや難		やや易	
耐倒伏性	極強		弱		極強	
耐病性	葉いもち病	弱	弱		弱	
	穂首いもち病	中	弱		やや強	
	白葉枯病	強	弱		強	
	紋枯病	中	—		中	
早草	晩	性	中	生	中生の晩	晩生の早
調	査	地	九州農業試験場			
調	査	年次	標肥:昭43~46の4カ年, 多肥:昭42~46の5カ年			

(注) 1. 収量比は備南糯を100とした。
2. 玄米品質は数値の小さいほど良いことをしめす。

は稈長・穂長はよく似ているが、ヒヨクモチはふ色が黄白であり、草状は梗のシラヌイに類似しているため、本系統との最大の相違点はふ色と草状にあるといえよう。

生態的特性 出穂・成熟期は祝糯より2～3日早く、備南糯と同程度で、九州北半では中生に属する。倒伏にはきわめて強く、備南糯や祝糯にまさる。白葉枯病Ⅱ型菌に対しては黄王程度に強く、祝糯、備南糯、サイゴクモチにはるかにまさる。いもち病には前記三品種と同程度に弱い。紋枯病には備南糯と同程度で中位である。

栽培上の注意 熟期の点で、九州地方では標高300m以上の山間高冷地への導入は不適である。草丈がヒヨクモチと同様にごく短稈で、耐倒伏性や耐肥性に富むので、多肥条件や肥沃地向である。やせ地や少肥条件では十分な生産力を発揮しえない。施肥料・施肥法・栽植密度などの耕種条件は梗のレイホウ、トヨタマに準ずる。

いもち病に対して弱点があるので、常発地への導入は避けるようにすべきである。白葉枯病のⅡ型菌には強いが、Ⅰ型菌(ベニヤ菌)には日本稲の大部分の品種と同様に弱いので、防除対策の万全が望まれる。

本品種のごく短稈な草型と、ふ色が明瞭な紫褐色であることは、刈取り前の立毛中に、異株を除去するのに好都合であるので、これを励行して、糯としての純度を高めることは、商品性の向上に役立つことが大きい。

適地および奨励品種採用果 本品種は昭和43年以降4カ年にわたって関係府県に配付し、地方的適否が検討されたが、長崎県・熊本県・大分県で優れた成績を認め、これら各県の中山間地帯から山麓、平坦、沿海地帯にかけて適し、とくにこれら地帯の肥沃地ならびにいもち病の発生が少ない地帯に好適する。

昭和47年から長崎県・熊本県で奨励品種に、大分県で認定品種に採用し、普及に移されることになった。

命名の由来 「茜糯」を意味し、ふ色が紫色を帯びた赤黄色、すなわちあかね色の糯品種である。

(九州農試作物第1部作物第1研究室長 岡田正憲)

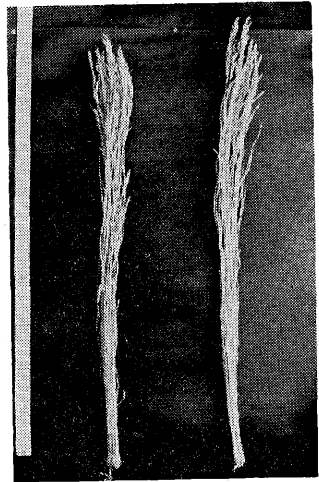
セ イ レ イ

登録番号 水稲農林228号(系統名:中部2号)

来歴 昭和35年愛知県農業試験場稲橋分場において、「34-11B」(銀河×藤坂5号のF₆系統、系統名:銀藤B)を母とし、「34-15B」(万代錦×若金のF₆系統、後の秋晴)を父として人工交配を行ない、以後系統育種法により育成されたものである。昭和43年度F₈より「中部2号」の系統名で関係府県に配付して地方適否を確かめたもので、昭和47年度世代はF₁₂にあたる。

形態的特性 稈長はハウネンワセより5cm程度短く、

穂長はハウネンワセよりやや長く、中位の部に属し、穂数はハウネンワセよりやや少なく、草型としては短～中稈の中間型に属する粳種である。移植時の苗丈は中～やや長めで、葉幅は中位で、葉はたれることなくがっちりとした苗型である。稈はハウネンワセよりやや太く、株立ちはやや開く程度であり、上葉はやや多めに



〈左よりセイレイ、ハウネンワセ〉

立つ。短芒を少程度有し、ふ先色は白で粒着はあらく、脱粒は難である。玄米は中粒で、心白・腹白とほとんどなく、千粒重はハウネンワセよりやや大きく、普及予定地帯では完全粒歩合も高く、玄米品質・食味もハウネンワセ同等以上に評価されている。出穂後は止葉がよく立ち、受光態勢も良好で、下葉の枯上がりも少なく、熟色はいたって鮮れいである。

第5表 セイレイの生育・収量調査成績

育 成 地	品 名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本)	倒 伏	a 当り収量		玄 米 千粒重 (g)
								子実重 (kg)	対標準 比(%)	
育 成 地	セイレイ	8.5	9.23	73	19.0	17	微	62.5	110	22.3
	ハウネンワセ	8.3	9.18	82	17.6	20	少	57.2	100	21.5
福 井 県 農 試	標肥	7.25	8.31	81	19.9	18	1	57.7	122	21.5
	多肥	7.24	8.29	85	18.3	18	2	47.4	100	20.9
福 井 県 農 試	多肥	7.26	9.2	83	19.9	19	0	56.0	116	21.4
	多肥	7.26	8.31	88	18.3	20	3	48.5	100	21.0

注) 育成地の調査は昭和41～46年の平均、福井県農試の成績は昭和44～46年の平均である。

生態的特性 出穂期はハウネンワセより2～3日おそく、育成地では極早生種に属する。稈はやや太く強稈で、トドロキワセ・トヨニシキなどよりもやや倒伏しにくく、多肥栽培でも株元から倒伏するようなことはほとんどみられない。しかし、レイメイなどにはおよばない。

いもち病抵抗は、*pi-a*・*pi-i* 因子を有し、圃場抵抗性も、*pi-i* 因子を有するヨネシロ・トドロキワセよりもやや強いようである。しらはがれ病には強くなく、ごまは

がれ病にはやや強く、秋落抵抗性も強い。紋枯病も発病はみられるが、ホウネンワセより少なく、極早生種としては種々の障害に比較的まとまった抵抗性を有するものと考えられる。

耐冷性も障害型および遅延型抵抗性ともにホウネンワセよりまさる。

適地および栽培上の注意事項 セイレイは極早生種として病害あるいは生理的障害に対する抵抗性をそなえ、土壌条件・気象条件もとくにえらぶこと少なく、各地で熟色鮮れいでしかも多収の成績をあげている。また最近各地で普及のめざましい「稚苗機械移植栽培」にも適し、成熟期の倒伏・下葉枯れも少なく、この面より機械刈りにも好適する品種である。適応が見込まれるのは温暖地域・北陸地方の中山間・山間地域であり、いもち病抵抗性がすぐれ、山間向き品種として耐冷性もそなえた品種であるが、温暖地域では標高400~700m程度までの冷害にはたえるが、北陸・北関東地方では、標高300~400m以上の地域では年次による障害が多分に考えられるので、普及範囲については十分注意しなければならない。

また穂発芽が易であること、および過熱になると玄米光沢が急激に低下する欠点を有するので、収穫は刈取りの適期を逸することなく、早めに実施することが望ましい。

奨励品種採用県 福井県の奨励品種として採用されたもので、同県の山沿地域・中山間、山間地域のいもち病常発田、あるいは例年倒伏のみられる不良環境田を対象とし、4500haの普及が見込まれる。

同県の中山間、山間地域では、倒伏あるいはいもち病の被害により玄米品質を低下することがしばしばで、産米改良上大きな支障をきたしている。

また、同県嶺南地方では、老朽化水田・湿田も多く、冷水の影響などによる低収地帯が多く、さらに成熟期には強風による倒伏がみられ、収穫の機械化もはばまれて玄米品質の低下をきたし、そのため産米改善対策が急がれている。

このような地帯に、稚苗移植適応性も高く、倒伏・いもち病耐病性・冷水性にすぐれ、品質も好ましい品種として「セイレイ」の普及が見込まれている。

命名の由来 山間地向けの熟色の美しい品種として「清嶺」を意味し、また「シュウレイ」（秀嶺）の姉妹品種であることによる。

(愛知県農業総合試験場山間技術実験農場 森元武)

だいず

オクシロメ

登録番号 だいず農林59号(系統名:東北35号)

来歴 東北農業試験場栽培第2部作物第3研究室(刈和野)において、昭和35年に「だいず東北6号」(ネマシラズ)を母とし、「南郡竹館」を父として人工交配を



〈左よりオクシロメ、農林4号、南郡竹館〉

行ない、以後系統育種法により選抜国定をはかり、昭和41年(F₆)には「刈系23号」の系統番号を付して生産力を検定するとともに系統適応性検定試験に供し、昭和44年(F₉)には「だいず東北35号」の系統名を付し、関係係に配布して地方的適否を確かめてきたもので、昭和47年の世代はF₁₂である。

形態的特性 草姿は父本の「南郡竹館」に似て、主茎は太くて強く、茎長は普通80cm台で蔓化が少ないが、生育量は大きく倒伏はややなびく程度である。着莢は主茎の頂部付近にとくに多く、やや密莢型に属する。花は紫色、熟莢は灰褐色で、灰白色の毛茸をつける。粒は百粒重が23g程度で中粒のうちでは小さい方に属し、豊楕円形を呈し、種皮は黄白色で光沢は中、臍色はいわゆる白臍で、褐斑粒や紫斑粒の発生が少なく、また虫喰粒も少ないなど生育中の諸障害はきわめて少ない。子実の成分は粗蛋白質40.5%、粗脂肪19.5%で、蛋白質含量がやや高いとはいえ、豆腐の歩止りが高く豆腐原料に好適する良質な品種である。

生態的特性 熟期は、北東北では「岩手2号」より約6日早い晩生種、また東北の中・南部では「ライコウ」よりやや晚い中の晩生種に属する。

耐病虫性では、だいず黒痘病に全く罹病せず、シストセンチュウ抵抗性は最強で、紫斑病にもやや強い。だいずモザイク・ウイルス病および萎縮・ウイルス病の両

第6表 オクシロメの試験成績(東北農試刈和野試験地普通圃)

品 種 名	開 花 期 月・日	成 熟 期 月・日	主 茎 長 cm	生 育 中 の 障 害			子 実 重 kg/10a	百 粒 重 g	粒 の 障 害		品 質
				蔓 化	倒 伏	ウ イ ル ス			虫 害	腐 敗	
オクシロメ	7・31	10・17	86.4	少	少～中	微～少	262	23.2	微	微	中の上
ライコウ	7・31	10・13	92.1	少～中	中	微	239	23.6	微	微～少	中の上
農林4号	8・7	10・18	87.5	無～少	微	中	190	24.0	微～少	微～少	中の下

注) 昭42～46年の5カ年平均。

A, B系統には抵抗性であるが, 両C系統には罹病性である。

線虫被害圃における収量性は, シストセンチュウに対する抵抗性が強いので, 抵抗性の弱い品種「農林4号」にくらべて111%も多く, 線虫被害のない普通圃場においても, 熟期のほぼ等しい「ライコウ」にくらべて10%も多収である。多肥, 密植, 晩播のどの条件にも適応する安定性の高い品種であって, 水田転換畑でもよく多収性を発揮し, 10a当り600kg台というような高収の成績も得ている。

栽培上の注意 北東北では晩生種に属するので, 北東北の山間冷涼地および太平洋沿岸で生育遅延のおそれがある地帯では作付けないこと。多肥条件と密植条件とが重なった場合には蔓化・倒伏を助長し, 減収のおそれがある。栽植密度はa当り1,000～1,100本が好適する。だいでモザイク・ウイルスおよび萎縮・ウイルス病の両C系統の発病が多い地域ではアブラムシの発生に注意する

こと。

適地および奨励品種採用県 東北地方北部では「岩手2号」より約6日早い晩生種, 東北の中・南部地帯では中の晩生種として広く適応し, とくにこれらの地帯の線虫被害地には最も好適する。奨励品種採用県は青森県と山形県である。青森県では晩生種として比較的作付の多い「岩手2号」と「野起1号」にくらべ, 本品種は粒がやや小さいが, 障害粒も少なく, 品質も白目良質で商品性が高く, 安定多収の点でもすぐれているので, 県下全域を対象として「岩手2号」と「野起1号」におきかえる。山形県ではウイルス病の発生が少ない県下全域の普通畑および転換畑を対象として「奥羽13号」とおきかえる。

命名の由来 普及予定地帯から, 芭蕉の紀行文『奥の細道』を想起することによって同時に, 晩生の白目品種であることを意味する。

(東北農試栽培第2部作物第3研究室長 松本重男)

邪魔なお天気②

大垣 智昭

試験場後援会(?)の農家の中で, 1軒だけ毛色の違った試験場の親類ともいべき農家があった。その高島おバアさんのことを, 若干物語りたいと思って, この小文をしたために至ったのであるが, よく世間でいう〇〇〇バアさん式にいえば, “試験場バアさん”ともいうのが, 旧庁舎のすぐ下に住まわれる高島カネさんである。

やはりミカン農家で, 早く夫君に死別され, 現在は息子さんが家業のミカン栽培をやっているが, 苦勞してミカン栽培と子女の教育をされた女丈夫であり, 筆者らが大変にご厄介になったからいうのも何でもなく, 非常に尊敬のできる農家の婦人である。かつて, 藤田さんに“柑連(神奈川県柑橘農業協同組合連合会のこと)で毎年生産者大会をやるが, 共進会の表彰などとともに, ミカン産業の地の塩ともいべき, 一生懸命やってきた寡婦の中から数人ずつ, その長年の勞をねぎらう表彰をしたらどうか, たとえば根府川の高島カネさんのような……”といわれた人である。

試験場のすぐ下に住むと書いたが, 急傾斜地のこととていう表現になるのだが, 根府川部落から少し外れたところに,

1戸1戸かなり離れて居宅がある関係からか, 高島さんのほうでも, 試験場をたよりにされたのではないかとも思う。おばさん(今でこそおバアさんだが, 筆者が赴任した頃はおばさんであり, おバアさんなどといったら, それこそ大きな声でおこられ, あとでワハハ……と高笑いしたことであろう)は足繁く行ったり来たり(でなくて, 正確には上って来たり, 降りていったり)し, 朝会えば“お早よう”夕方道で別れる時には“さようなら”の挨拶はいうまでもないが, 時に妙な挨拶をされるのに気付いたのは筆者1人だけではないと思う。ひどい雨の時, 大変寒い朝などに, “邪魔なお天気でございます”といわれるのがそれである。

初めにこの挨拶を聞いた時, 邪魔なお天気とはまた, ユーモアのあるおばさんだなどと思ったり, こんな挨拶の言葉があるのかなあと聞き流していたものであるが, ある時ハタと思ひあたる日があった。思うに, 邪魔などは, ミカンの栽培や貯蔵によくない気象状態だなどということ。高島さんの挨拶を聞いていると, 快晴の日には邪魔なお天気だなどとは勿論いわれない。同じ雨でも, 夏の早天が続いているときに降った夕立の場合, 自分が奥のミカン山からズブぬれになって走り帰って来ても, “よい雨でした”と言葉をかけられる。

(神奈川県園芸試験場研究部長)